

小学校英語教育事前準備プログラム事業

～ 自然な環境で英語に触れる機会の創生 ～



都留市教育委員会

◆ はじめに

将来を担う子どもたちにとって、英語は単なる他国の言語という存在ではなく、未来の可能性を広げる重要なツールです。

英語を理解し使いこなす能力は、子どもたちにとって新たな世界への扉を開く重要なスキルとなります。

2020年度から実施された新学習指導要領では、小学校の英語教育が大きく変化し、3年生から「外国語活動」として英語が必修化され、5年生からは「外国語」として正式科目になるなど、今後ますます進展するグローバル化に備えるため、英語教育が強化されています。

◆ 日本人は英語が苦手？

日本人が英語に弱い理由としては、教育システムや文化的背景、言語的な違いなど、いくつかの要因に起因していると言われています。

教育システム

文法重視の教育

日本の英語教育は、これまで文法や読解力に重きを置き、テスト中心の学習が多く、リスニングやスピーキングの訓練が少ないため実践的なコミュニケーション能力が向上しにくい。

文化的背景

恥の文化

日本人は間違いを恐れ、恥ずかしいと感じる文化がある。このため、英語を話す際に自信を持たず、積極的に英語を話す機会を避ける傾向がある。

英語を話す機会が少ない

日常生活で英語を使う機会が非常に少ないため、学んだ知識を実践する場が限られる。

言語的な違い

発音の違い

日本語には英語のような多様な母音や子音が無いなど、音韻体系が大きく異なる。

文法構造の違い

日本語は、（主語－目的語－動詞）の順序だが、英語は（主語－動詞－目的語）の順序など、文法構造が異なり、この違いが、英語を流暢に話すことを困難にしている。

学習環境

英語の使用頻度

日本では、英語を日常的に使う環境が少ないため、学んだ英語を実際に使う機会が少ない。

教材の質と方法

従来の教材や教え方は、コミュニケーション能力の向上に必ずしも適しているとは言えない。近年改善されつつあるが、依然として改善の余地がある。

モチベーションと目標設定

英語を学ぶ目的の不明確さ

多くの子どもは、入試や資格取得のために英語を学ぶが、実際のコミュニケーションツールとしての英語の重要性を感じにくい。

グローバルな視点の欠如

日本は地理的にも文化的にも比較的孤立しており、英語を使って国際的なコミュニケーションを取る必要性を感じにくい環境にある。

このように日本人が英語に弱い理由には、複数の要因が絡み合っています。

これらの課題を克服するためには、教育方法の見直しや実践的な英語使用の機会を増やすことが重要であり、**英語を使うことへの自信**を持てるような環境づくりを行う必要があります。

◆ 幼児期から英語に触れることの重要性

幼児教育で名高いイタリアのマリア・モンテッソーリは、「生物がもっている環境適合能力は、誕生直後に強烈に働き、周りの環境に順応できるようになった後、なぜか消えていってしまうと述べています。「才能逡減（さいのうていげん）の法則」

また、**言語の吸収に最適な年齢は6歳まで**と言われており、6歳までに英語に触れる経験は、その後の英語力の基礎となり、英語学習が遅くなればなるほど**英語耳**の発達が鈍るため英語の習得は非常に難しくなるとも言われています。

話せる英語を身につけるためには、**幼児期から自然な環境で英語に触れる**ことが重要です。

○ 英語耳とは

英語の発音やイントネーションを正しく聞き取れる能力のことです。

英語耳を身につけると、英語の発音やイントネーションが自然に聞こえてくるため、英語を瞬時に正しく聞き取り理解できるようになります。

スムーズな英会話をする上で、もっとも重要な要素のひとつと言えます。

◆ 自然な環境での言語習得を重視したアプローチ

英語に触れる機会を増やす

外国人との接触の機会を作り、日常的に英語に触れる（聞く・話す）場面を増やす。

インタラクティブ（対話形式）な学習ツールの活用

子ども向けの英語教育のアプリやビデオ、テレビ番組や映画を視聴することで自然な英語のリズムや発音に触れさせる。

家庭での英語環境の整備

親が簡単な単語やフレーズで積極的に英語で話しかけたり、英語の絵本の読み聞かせや英語の童謡や歌を聴かせるなど、楽しく英語に親しめる機会を増やす。

◆ 小学校英語教育事前準備プログラム事業

趣 旨

本市では、「輝かせます 学びあふれる つるのまち」を基本理念とし、次代を担う子どもたちが持つ、一人ひとりの個性や能力、可能性を一層伸ばすための教育を充実するとともに、自ら学び、自ら課題を解決できる力を身に付けた、心豊かなたくましい人づくりを目指しています。

このためには、子どもたちが「確かな学力」「豊かな人間性」「健康・体力」の知・徳・体をバランスよく身に付けられる教育を実践し、変化の激しいこれからの社会を生き抜くために必要な「生きる力」を育む持続的な学習環境の提供が重要となります。

本市では、子どもたちの可能性を伸ばすための様々な策を講じる中で、その方策の一つとして、**幼保・小・中の学びの連続性を意識した、効果的な英語教育の推進**を目的に、幼児期から自然な環境で英語に触れることで、小学校から始まる英語教育へのスムーズな接続と英語力、特に**話せる英語力**の向上を図る「小学校英語教育事前準備プログラム事業」を展開し、本市の子どもたちが18歳の時点で基本的な会話が英語のできるよう、英語教育の充実を図ります。

事業内容

話せる英語を身につけるためには、幼児期から自然な環境で英語に触れることが重要です。

子どもたちが保育園や幼稚園での生活の中で、当たり前のように外国人に接し、遊びや活動の中で意識せずに英語を聞く「hear」と、英語の絵本の読み聞かせや簡単な英単語の学習等を通して英語を意識して聞く「listen」の双方により英語耳を育成するとともに、積極的に英語を話す「speak」の機会や英語での会話「talk」の機会を増やすことで英語や外国語文化に対する抵抗感を軽減し、小学校から始まる英語教育にスムーズに移行できるよう、外国人の英語指導員（英語を母国語として育った又は英語を常用語として使用する外国出身者で、多文化共生に資する者）を市内の保育園や認定こども園に派遣し、遊びや生活の中で自然に英語に触れられる保育環境の創出と、子ども向け英語教育のアプリやビデオなど、インタラクティブな学習ツールを活用した子どもたちの興味を引き付ける英語活動を行います。

また、教育課程特例校（英語特区）ではない小学校に外国人指導員を定期的に派遣し、3年生から始まる「外国語活動」に準じた活動を1年生から行うことで、切れ目ない英語教育を実践し、子どもたちの英語力の向上を図ります。

○ 教育課程特例校（英語特区）とは

より効果的な教育を実施するための特別の教育課程を編成することを認められた学校で、本市では、都留文科大学附属小学校が教育課程特例校の英語特区に指定されています。都留文科大学附属小学校では、1年生から6年生まで一貫性のある英語教育を実施しています。

◆小学校英語教育事前準備プログラム事業を展開するための試験的事業の実施

小学校英語教育事前準備プログラム事業の本格実施に向けた制度設計を目的に、外国人指導員の活動内容等の検討や課題の洗い出し、事業効果を検証するための試験的事業を実施します。

○ 実施場所

都留市立宝保育所 及び 都留市立宝小学校

○ 実施期間

令和6年9月2日から令和7年8月31日

○ 外国人指導員

DUCHESNE AMANDINE (デュシェーヌ アマンディーヌ)

フランス出身で、同国のトゥールーズ・ジャン・ジョレス大学を卒業後、都留文科大学に1年間語学留学生として来日。

英語・フランス語・スペイン語・日本語の4か国語を話すマルチリンガル（多言語話者）な女性です。

